

# 遠藤周作「白い人」論

——〈私〉の〈みにくき〉に着目して——

大塩 香 織

はじめに

「近代文学」に発表された「白い人」は遠藤周作の初期作品である。第三十三回芥川賞を受賞した<sup>2</sup>こともあり、本作品は遠藤研究においても重要な作品の一つとして扱われてきた。〈仏蘭西人〉の父と〈独逸人〉で熱心な〈清教徒〉の母との子である〈私〉は、生まれつき〈斜視〉であった。〈私〉は父の言葉によって自らの〈みにくき〉を知り、母からは〈きびしい禁欲主義〉を強いられる。そのような〈私〉は女中のイボシヌが老犬を〈虐待〉する姿を見て〈情慾の悦び〉を知る。大学生となった〈私〉は、神学生ジャックの〈攻撃〉への〈復讐〉としてマリー・テレーズを舞踏会へ誘い、酒に酔わせる。戦争が始まりヘナチの秘密警察の片割れとなった〈私〉は、訊問所でジャックと再会し、ジャックに拷問を加える。作品の梗概を述べると右の通りだが、先行研究では〈私〉が提示する〈悪〉を巡る物語として読まれてきた。水谷昭夫は〈私〉の〈悪〉を〈それ〉と呼び、次のように述べている。<sup>4</sup>

「清教徒」の「母」、「父」の放蕩に対する反動としての厳しい禁欲主義、その押しつけ、「イボシヌの白い腿」によってそれは目覚め、「アラビヤの沙漠」がその感情を解放してくれる。(中略)「私」はつまり「文化とか基督教とか、ヒューマニズムなどなんの役にもたない」「聯合軍であろうが、文明であろうが、黄色であろうが」人間はみな虐殺し、虐殺されるのだという、悪の全き平等性に恍惚とする地点に立っている。サディズムがあらわれる。

水谷は〈虐殺〉を〈悪〉と呼び、それに〈恍惚とする〉のが〈サディズム〉であり〈私〉であるとする。水谷は〈私〉の行為のうち〈ジャック神父の口を割らせるために、マリー・テレーズを犯す〉など〈私〉の攻撃的な側面に着目していると言える。

作品の中で〈私〉と対峙する存在として扱われてきたのはジャックである。武田友寿はジャックの自殺を〈信義を貫くために彼は自殺を選ばなければならなかった〉とした上で、ジャックと〈私〉について次のように述べている。<sup>5</sup>

この作品の主題はジャックと「私」の確執と争闘、つまりどちらが結局勝を制するか、という構図の上に成り立っていた。そこでひきおこされるさまざまな問題は、だから、二つの論理のどちらに正当性があるのかという興味をばくらに喚起するのだが、結果としてみれば、作者はこの二つの論理を共に破綻させることによって論理的整合性において存在を意味づけようとする思考に鉄槌を下している。

武田はジャックが〈正統—善〉の〈論理〉、〈私〉が〈異端—悪〉の〈論理〉を持ち、そして両者の〈論理〉は〈破綻〉しているとする。本作品を〈私〉と〈ジャック〉の対立として見なす点は首肯できる。他方で、武田はジャックと〈私〉の行為をそれぞれ〈二つの論理〉として善悪一般に還元している。武田のように、ジャックと〈私〉の二項対立をそのまま善悪の対立として見なしているのは先に引用した水谷の論も同様である。しかし、〈私〉の行為をそのように集約すると、様々な問題が生じる。例えば、学生時代に〈私〉はジャックの行為を〈攻撃〉と呼び、自らはジャックに〈復讐〉している。しかし、作品終盤の訊問所では〈拷問〉を受けるジャックに〈耐えろ、耐えろと念じていた〉。さらには、〈私〉はジャックを敵対視しながらも、その死を喜ばない。むしろ〈私〉はジャックの死に戸惑いを見せている。このような〈私〉の行為を全て〈悪〉と呼び、それに対立するジャックの行為を全て善とする二項対立の構図で作品を理解することはできないだろう。それゆえに、〈私〉が示す〈悪〉の具体的な内実には踏み込む必要がある。

〈私〉における〈悪〉の起因を母の〈禁欲主義〉の中に見出すのも先行研究の傾向と言える。先の水谷の論も同様である。水谷はその上で、〈私〉の行為を〈悪〉と結びつけ、その〈悪〉を〈サディズム〉と呼ん

でいるのである。水谷だけではなく、笠井秋生もまた〈私〉の〈サディズム〉を母の存在と関連づけて論じている。<sup>6)</sup>

〈私〉のサディズムは、〈子供としての喜びや自由を禁じ〉、肉欲の〈炎をかきたてる一切のものを追い払おうと懸命だった〉母親の体現するピューリタニズムへの逆逆の姿勢を伴って開花したといつてよからう。

しかし〈私〉が自らを裏付けるものとしてたびたび思い出す事項のうちには母は含まれていない。例えば、〈カトリックの哲学者〉の言葉を聞きながら、〈私〉はその言葉を〈おかしく〉思い、次のように考えている。

もちろん、こちらには、そうしたモラリストの信念をくつがえすだけの理論も思索もあるわけではない。ただ、私は自分が斜視の青年であること、あの十二歳の日に藤の花の散る窓からみたイボンヌと老犬の光景を知っていた。アデンの迷路で少年の頭に躍り狂った褐色の娘の裸像の記憶をもっていた。そして白く燃えた円盤の太陽の下で熱風に焼けただけだれた枯草と、岩の下で……、それを思いだすだけで充分だった。

ここで〈私〉が回想する出来事に母は含まれない。代わりに思い出されるのは、〈自分が斜視の少年であること〉、〈イボンヌと老犬の光景〉、アデンでの出来事である。そのうち〈イボンヌと老犬の光景〉は水谷の論のように〈サディズム〉の〈目覚め〉となる出来事として扱われてき

た。アデンでの出来事も同様である。一方で、自分が斜視の少年であること〈私〉の中で繰り返し唱えられることであるのにも関わらず、直接〈私〉の問題として取り上げられてはこなかった。しかし、〈私〉が繰り返し自らを形成したものとしてそれを語っている以上、〈私〉の行為を考えると、〈私〉が〈斜視〉であることの重要性は軽視できないだろう。本稿は〈私〉の回想を改めて整理し、自らの行為を〈悪〉と呼びながら、ジャックの自殺に当惑する〈私〉が辿り着いた地点を明らかにすることを目的とする。

## 一

作品は一九四二年、戦時下のフランスで〈私〉が〈今日、仏蘭西人でありながら、ナチの秘密警察の片割れとなり、同胞を責め苛む路を私に選ばせたものを説明するため〉に書かれた〈記録〉という体裁を取っている。作品内現在の〈私〉がその〈記録〉の中で最初に書き出したのは、父との会話であった。

私が決して忘れることのできない仕うちがある。ある日、彼は指を私の目の前に動かしながら言った。

「右をみると言うのに、右だよ」それから彼はワザと大きな溜息をした。「一生、娘たちにもてないよ。お前は」

自分の顔だちのみにくさをハッキリ思いしらされたのは、この時からだった。私はそれを残酷に宣言した父を憎んだ。鏡をみることもくるしく、路で少女たちにすれ違う時やあたらしい女中に始めて引き合わされる時、辛かった。

父は幼年期の〈私〉の外見を否定し、「一生、娘たちにもてないよ。お前は」と、〈みにくさ〉ゆえに〈娘たち〉から拒絶されることを告げる。この言葉によって〈私〉は自らの〈みにくさ〉を知るのである。父に〈みにくさ〉を宣告された〈私〉は中学生の時、同世代の少年たちのように〈女学生のことやガリーエヌ街の淫売の話〉をするなど、女性に対して恋愛感情や性的興味を抱くことができなかった。むしろ〈私〉は女性を恐れる。〈私〉は女性と会うとき〈辛かった〉という感想を抱くのである。

他方で、大学の入学式のあと行われた〈ヴィズウ〉という〈親睦パーティ〉でのことを〈私〉は〈どの娘たちも、斜視の私を誘ってくれなかった〉と回想する。〈娘たち〉は〈私〉が〈斜視〉であるがゆえに〈私〉の存在を無視していた。その上、このような出来事は〈私〉にとって初めてではない。大学生の〈私〉は〈この自分のみじめさ〉に〈慣れている〉。すなわち、〈私〉がその外見の〈みにくさ〉ゆえに〈娘たち〉に拒絶されるということは、大学に入る以前から継続的に起こっていたのである。〈娘たち〉のその行為は〈私〉が作品冒頭で書き記した〈虐殺〉や〈拷問〉などの積極的な苛めではない。しかし、彼女らは無意識のうち〈私〉を排除し苛めていたのである。少なくとも、〈私〉から見える世界は〈みにくさ〉によって自分自身が苛められている世界であった。父の予言は実現していたのである。

自らの〈みにくさ〉によって女性から苛められていた〈私〉に対し〈清教徒〉である母が提示したのは〈禁欲主義〉であった。

父にたいする反動から当然母は私に、きびしい禁欲主義を押しつけ

た。十歳を過ぎてから従姉妹とさえも二人きりでいることを許さなかつた。彼女はなによりも、私を罪に誘うものとして肉慾の目覚めを警戒したのである。夜、床につく時も下半身から眼をそらして寝衣に着かえさせられ、両手を毛布の下に入れることも禁じられた。母は、既に慾望の血が騒ぎはじめた私の肉体から、その炎をかきたてる一切のものを追い払おうと懸命だった。

〈私〉の母は〈私〉から〈肉慾〉という〈炎をかきたてる一切のもの〉を追い払おうと懸命だった。父によって外見を否定され、〈みにくさ〉によって女性に近づくことができなかつた〈私〉は、母によってその〈慾望〉自体を抑圧されたのである。そんな中であつて、「私」は女中のイボンヌが老犬を苛める光景を目撃する。〈私〉はその体験を次のように回想する。

私がその時味わつたのは、情慾の悦びである。あの肺病やみの老犬の首を押えつけたイボンヌのむっちりした膝がしらは私の眼に焼けつくように白く、あまりに白くこつた。私の肉慾の目覚めは虐待の快楽を伴つて、開花したのである。

〈みにくさ〉によって他者から苛められる〈私〉は、反対に老犬を苛めるイボンヌの姿に〈肉慾〉を感じる。〈私〉はその〈感覚〉を〈フロイト流〉の〈子供の母にたいするコンプレックス〉とは異なり、へたんに女性にむかつてのみ、自分の加虐本能を感じたのではない。女性のみならず、すべての人間、大袈裟にいうならばすべての人類を苛みたいという慾望を私は後年、感じたのであると書き記す。〈私〉はイボンヌ

の姿を目撃することで〈加虐〉の〈慾望〉を持ったのである。

〈加虐〉するイボンヌに〈肉慾〉を覚えた〈私〉が自身でも他者を苛めてみようとするのがアデンでの出来事である。〈私〉は曲芸で娘に踏まれる少年に紙幣を渡し、少年を思うままにする。しかし、この体験から得られるはずの満足は〈私〉には訪れない。

アデンの旅行後、ほとんど白痴のような状態になつた。なにをするのも懶い。すべてのことに関心も、気力も持てない。一日中ベッドの上になぞをべて、煙草を幾本もふかし続け、濁つた眼を虚空に注ぎながらジツとしていた。時々、あの原色のなまなましい岩の赫きと、その岩の背後のあまりにも濃い影のなかに、うつ伏しに倒れているアラビヤの少年の裸の姿態が甦つた。私の唇はふるえながら（そうされるに価するんだ）と呟いた。しかし、少年が、なぜ、そうされるに価するのかわからなかった。

〈私〉はアデンへの旅行から帰つてきてもほとんど白痴のような状態になつただけである。代わりに現れるのは少年に対する（そうされるに価するんだ）という考え方である。〈私〉は自らの行為を、少年が苛められるべき人間であつたためであると正当化しようとする。ここでは〈私〉の〈肉慾〉は全く立ち消えている。自らの〈みにくさ〉によって〈加虐〉される〈私〉は、イボンヌの〈加虐〉に〈肉慾〉を感じることはできても、自らの他者への〈加虐〉には喜びを見出すことはできないでいる。

一方で、アデン旅行後には〈私〉は学校で〈カトリックの哲学者〉の講義を振り返り、その言葉を次のように捉えている。

このカトリックの哲学者が説く、人間の善や徳、人間の精神的進歩、人間の歴史的成熟という言葉をも、私は耳もとで幻聴でも鳴っているように滑稽に思いながら聞いていた。(中略) もちろん、こちらには、そうしたモラリストの信念をくつがえすだけの理論も思索もあるわけではない。ただ、私は自分が斜視の青年であること、あの十二歳の日に藤の花の散る窓からみたイボンヌと老犬の光景を知っていた。アデンの迷路で少年の頭に躍り狂った褐色の娘の裸像の記憶をもっていった。そして白く燃えた円盤の太陽の下で熱風に焼けたれた枯草と、岩の下で……、それを思いだすだけで充分だった。

〈カトリックの哲学者〉は〈人間の善や徳、人間の精神的進歩、人間の歴史的成熟〉を主張する。イボンヌ、アデンでの出来事を知った〈私〉は〈カトリックの哲学者〉の言葉を〈滑稽〉に思う。〈自分が斜視の青年であること〉、〈イボンヌと老犬の光景〉、〈アデンの迷路〉に共通するのは〈加虐〉する者とされる者の関係性である。〈カトリックの哲学者〉たちの言葉を〈私〉は、イボンヌが老犬を苛めたことや〈私〉が〈みにくさ〉のために周囲の人間から無意識の〈加虐〉を受けている事実を無視した論理であると見なす。他者に苛められ続け、〈加虐〉の〈欲望〉を知った〈私〉にとって〈カトリックの哲学者〉が展開する世界は〈滑稽〉以外の意味を持たないのである。

## 二

老犬を苛めるイボンヌの姿を見て、〈加虐〉の〈欲望〉を持つも、ア

デンでその願望を行動に移してもそこに喜びを見出せなかったことは先述の通りである。〈私〉はそれ以降、自ら〈加虐〉の立場に立つために行動を起こさない。しかし、ジャックの登場によって〈私〉は新たな側面を見せる。

〈私〉とジャックとの出会いもまた、〈私〉の〈加虐〉によるものであった。教室で着替えるモニックとマリー・テレーズの会話を立ち聞きした〈私〉は、モニックのジャックに対する「みにくいからよ!」という言葉聞き娘の〈下着〉を〈引き裂いた〉。この行為は、〈私〉がジャックに向けられた言葉に反応し、ジャックと自らを重ねたときに衝動的に現れる一種の〈加虐〉行為だろう。その行為を目撃したジャックが〈私〉を批判することで二人の対立は始まるのである。

神学生であるジャックは〈はげ上って、頭の上には、あわれな赤毛が残っていた〉。〈私〉はジャックを〈斜視の私よりも兎口の男よりもみにくかった〉と述べている。ジャックは〈私〉と同じく〈みにくい〉外見を持っていたのである。マリー・テレーズの下着を引き裂いた〈私〉に対し、ジャックは次のように語りかけている。

「醜いことは辛い」ジャックは呻いていた。「辛いよ。子供の時、ぼくは母や姉さえ、ぼくの顔から眼をそむけるのを感じた。だが十四歳のとき、僕は自分の顔だちが十字架であることを知ったんだ。基督が十字架を背負ったように、子供のぼくもそれを背負わねばならぬことを知ったんだ」

ジャックもまた〈私〉のように外見によって他者に、ひいては女性に苛められてきていた。しかし〈私〉が〈加虐〉に〈欲望〉を見出したの

に対し、ジャックは自らの〈みにくさ〉を十字架とし、基督のようにその〈みにくさ〉を引き受けると言う。ここで〈みにくさ〉を持ち合わせる〈私〉とジャックは大きな違いを見せている。しかし、〈私〉はジャックに同調しない。ジャックは〈私〉に「祈っているよ。君。たとえ、君が神を問題にしないで、神は君をいつも問題にされているのだから……」という言葉を受けかける。神学生であるジャックは外見によって直面する問題を祈ることで解決している。繰り返した通り、〈みにくさ〉によって常に苛められている〈私〉にとって、それは意味を持たない。それだけでなく、ジャックに対し〈私〉は次のように考えている。

その姿勢、そのみぶりは私に突然、基督を思いださせた。基督のように彼も亦、私の斜視の傷を背負い、ひきうけようとして酔っていた……。

〈私〉にとって〈斜視〉とは、自らが苛められている原因ともなるものであった。ジャックはその〈斜視〉を〈ひきうけよう〉とする。すなわち、ジャックは〈みにくさ〉によって他者に苛められる事実を認めただ上で、それを超えた世界へ祈りによって進もうとしているのである。しかし、そのジャックを〈私〉は〈酔っていた〉と形容する。その陶醉とは〈私〉にとって〈斜視〉によって周囲の人間から無意識の〈加虐〉を受け持っている〈私〉を無視した〈カトリックの哲学者〉の世界と同等の意味しか持ち得ない。それゆえ、〈私〉はジャックを〈アーメン輩〉と呼び、ジャックの行為を〈攻撃〉と呼んだのである。

ジャックの〈攻撃〉に対して〈私〉はマリー・テレーズを利用し反撃しようとする。その反撃とは、マリー・テレーズを舞踏会に誘うことで

あった。舞踏会について、マリー・テレーズの参加を咎めるジャックは「先週の教会で司教の御言葉をきいただろう。今日基督信者は、いつよりも犠牲を捧げなくてはいけないことだ。独逸でくるしんでいる人々と、それから戦争が起らないために信者が行いを慎むことを聞いただろう」と〈叫んだ〉。ジャックにとって舞踏会とは、〈慎む〉べきものであり、マリー・テレーズには舞踏会ではなく教会で祈ることをジャックは言外に促している。〈私〉はマリー・テレーズを舞踏会に誘いながら、次のように考える。

私は彼女の耳もとに口をよせ、小声で囁きつつけた。マリー・テレーズのギスギスした体が曲馬団見物のかえりらしい子供や母親たちの群れのなかに消えていった時、私はほくそえんだ。兎も角、あの女はジャックに小さな秘密をもったのである。小さな秘密は次のウソ、次の秘密を生み、それは裏切りの谿に地響きをたてて崩れ落ちることを私は知っていた……。

マリー・テレーズが舞踏会に参加すれば、ジャックのそばにいるはずのマリー・テレーズも結局は男女の擬似的な恋愛関係が結ばれる舞踏会を優先することになるだろう。マリー・テレーズに舞踏会よりも祈ることを要求するジャックに、マリー・テレーズが舞踏会に参加するのを見せつければ、それはジャックに祈りよりも舞踏会のほうが優位であることを示すこととなる。ここで〈私〉は、自らの行為によってジャックとマリー・テレーズの関係が壊されることを確信している。一方で、マリー・テレーズと舞踏会に参加した後、次のように考えている。

夜風が私を覚した。女は死体のようにベンチに横たわっている。アデンのまひる、褐色の岩かげにアラビヤの少年も亦、このような姿勢で倒れ伏していた。寂寞としたものが私の胸をしめつけた。なぜだかわからない。悲しみというよりは疲労に、非常に深い疲労にちがひなかった。埋めるべき空間を埋めたあと、もはや、なにを為しているのかわからない。鉛色のアデンの空で円球のような太陽はふちだけ鈍く赫き上っていたが、私の魂は今、それに似て、青く燃えつづけていた。

ここで〈私〉が感じるのは、少年を苛めたアデンでの出来事のあとに感じたものとはほぼ同様の〈非常に深い疲労〉であった。〈私〉はたしかに、予定通り舞踏会に誘うことでマリイ・テレーズを騙し、ジャックを裏切らせた。しかし、舞踏会という場はそもそも〈みにくさ〉によって〈私〉を排除する人々が集まる場であった。それまでそのような場に近づかなかった〈私〉はマリイ・テレーズを誘う。舞踏会で〈私〉は学生たちに〈袖を引き合ってひそかにしのび笑い〉をされる。〈私〉はやはり蔑まれてしまう。そうであれば〈私〉が満足ではなく〈非常に深い疲労〉を感じるのは当然であるだろう。

## 三.

〈私〉はその後、ジャックとマリイ・テレーズに積極的に接近しないものの、自らの行為によって二者のつながりを破壊したと考えていた。しかし、母の死後〈私〉は教会へ通う二人を再び目撃することで、それが事実とは反していたことを知る。以前よりも〈痩せていた〉マリイ・

テレーズと何も変わらないジャックを見た〈私〉は、二人の関係を次のように推測する。

私にはなぜ、マリイ・テレーズだけがこのように変わったか、わからなかった。おそらく、彼女はあの舞踏会の夜からジャックに裁かれたのだろう。追いつめられたのだろう。私と肉慾の罪を犯したという汚れを消すため彼女は、痛責を身に課すことを要求されたのだろう。だがたしかなこと、重大なことは、この娘が、今、ジャックの暴君的な支配に従っていることだ。私がつき落したこの娘の過去は、逆に神学生の狂信の好餌となったにちがいない。彼女はふたたびジャックの、この神学生の手に戻ったのである。

〈私〉が再会したジャックとマリイ・テレーズは〈私〉が舞踏会の前を考えていたように〈裏切りの谿に地響きをたてて崩れ落ちる〉ことはなかった。むしろ、以前よりもマリイ・テレーズはジャックの世界へ引き込まれている。それを〈私〉はマリイ・テレーズがジャックによる〈暴君的な支配に従っている〉ものと見なす。ここで〈私〉は〈いいよ、うのない怒り、情けなさ〉を感じる。〈私〉の眼には、〈基督が十字架を背負ったように〉自らも〈みにくさ〉という〈十字架〉を〈背負う〉と言ったジャックもまた、結局は〈暴君的な支配〉で他者を苛める者として映ったのである。

〈私〉がジャックと再会するのは〈私〉が所属する独逸秘密警察の諷問所である。これまで〈私〉は〈加虐〉に〈慾望〉を感じながらも直接的な暴力を加えたことはなかった。しかし、教会でジャックの〈暴君的な支配〉を見た〈私〉はついに暴力によってジャックに対抗しようとする

る。そのために、〈私〉は拷問を受けながら「基督者は憎悪のため闘わない……正義の……」と主張するジャックに対して（そうだ、ジャックを拷問するのはアレクサンドルやキャパンヌではない。この俺でなければならぬのだ）と決意する。しかし〈私〉が持つのは〈加虐〉の〈慾望〉だけではない。〈私〉は、訊問を受けるジャックに対して様々な感情を抱いている。

彼の肉体に、くい込むかたい、鋭い響きを聞きながら、その肉体がどこまで耐えるかを待った。ふしぎに私は一方ではジャックが絶叫するのを待ちながら他方では、耐えろ、耐えろと念じていた。だがもし彼が拷問に屈し中尉の囁かれた低い声が甘くやさしく問いつめるままに、リヨン第六区の他の連絡員の名を言ったならば、私は勝つ筈だ。人間はやはり信じられぬ。人間は自己の肉体の苦痛の前にはやはり、すべての人類への友情、信義をも裏切る弱い、もろい存在である。

ここで〈私〉は二つの感情を抱いている。〈私〉は〈ジャックが絶叫する〉のを期待する。これは、ジャックが拷問に屈すれば〈私〉の論理が肯定され、ジャックや〈カトリックの哲学者〉たちの世界が否定されるからであろう。その反面、〈私〉は同時にジャックへ〈耐えろ、耐えろ〉と〈念じていた〉。思えば、ジャックと〈私〉はともに外見から苛められてきた存在であった。同じ運命を持つジャックが耐えなければ、それはジャックが最期まで苛められる者であり続けるということであり〈私〉もまたそこから抜け出すことはできないのである。ここでジャックは〈私〉にとって、固定された〈加虐〉される者とされない者の世界

を揺るがす一抹の可能性となる。

ジャックに対し複雑な感情を抱きながら〈私〉は、中尉たちに対して「マリー・テレーズという女学生がいます。その女を責めるのです。この男の前で」と提案する。〈私〉は拷問所で再びマリー・テレーズにジャックを裏切らせようとするのである。その〈裏切り〉は舞踏会の場合とは大きく異なり、マリー・テレーズの〈純白〉さが喪失することを意味する。既に触れた通り〈私〉はジャックに対しては〈加虐〉の〈慾望〉を抱くことがあっても、マリー・テレーズにはこれまでその〈慾望〉を抱いていなかった。それは〈私〉の目的がマリー・テレーズを通してジャックへ〈攻撃〉することにあつたためである。しかし〈私〉の眼前で「ぶたないで。ぶたないで」と〈白痴のように唇だけを動かした〉マリー・テレーズを〈私〉が〈聖女になりたがっていた〉と見なしたとき〈私〉は神学校のときよりも強烈な〈加虐〉の〈慾望〉を持っている。マリー・テレーズを他者のために自己犠牲を払う〈聖女〉ぶる者とする〈私〉の視線は、神学生のジャックの中に陶酔を見たときと同様のものではあつただろう。（俺は、犯す、俺は犯す）と〈呻〉きながら〈私〉は〈犯す〉という〈加虐〉によってマリー・テレーズの陶酔を壊そうとするのである。

マリー・テレーズの〈純白〉が汚されることは、ジャックにとっても重大な意味を持つていた。ジャックが〈私〉と同様に外見によって常に苛められている状態にあることは先に確認した通りであり、それゆえにジャックは〈基督〉のように〈十字架〉を背負い、カトリックの崇高な世界を目指していた。そんなジャックにとってマリー・テレーズは、唯一自らを苛めない存在であり、まさに〈聖女〉であった。〈私〉がその〈聖女〉を犯すことはすなわち、ジャックの〈聖女〉の喪失を意味して



いる。この状況にあつて、仲間を裏切らないためにジャックはそれを容認しなければならぬ。苛められながらもカトリックの世界を目指すジャックはマリイ・テレーズという自らの〈聖女〉が汚されることを看過しなければならぬのである。〈私〉はジャックに対して、苛められる者としての一縷の期待を持ちながら、その期待が壊されるように自ら仕向けていく。

しかし、ジャックは先の引用で〈私〉が想定した二つの選択肢のどちらとも異なる方法で死を迎える。ジャックは〈舌〉を噛みきり死んだのである。ジャックの死を知った私は、次のように考えている。

そうか、舌を噛んだのか、私は壁に頭を押しつけた。固い重い音が頭で響くのを感じていた。しらぬまにその頭をいくども壁にぶつけながら拍子をとっていた。悲哀とも寂寞ともつかぬものが胸をしめつけはじめた。かつてホテル・ラモでマリイ・テレーズを屈服させた瞬間、私はこれと同じかなしみを味わった。かなしみというより、非常にふかい疲れに似ていた。埋めるべき空間に埋めたあと、もはや、なにをしてよいのか、私にはわからなかった。(母を喪った時、私は決してこのような感情を味わわなかった)まるで、私がジャックをながいこと愛しつづけ、その愛に裏切られ、喪ったような気持ちだった。

ジャックは自殺というカトリックでは〈絶対に許してはならぬ大罪〉を犯して死んだ。しかし、その死によってジャックはマリイ・テレーズという〈聖女〉の喪失も、自らの〈十字架〉を背負うという問題からも解放される。〈加虐〉の対象であり、唯一の可能性でもあったジャック

が、それらの問題を解決することなく死を迎えたことを知った〈私〉は〈悲哀とも寂寞ともつかぬもの〉を感じる他ない。それは〈かつてホテル・ラモでマリイ・テレーズを屈服させた瞬間〉に感じた〈かなしみ〉と同種であった。舞踏会のとき〈私〉は同級生たちの目に晒され、〈受附〉で〈私〉とマリイ・テレーズを見た彼らは〈袖を引き合ってひそかにしのび笑いをした〉。それは〈みにくさ〉を持つ〈私〉が苛められ、その〈みにくさ〉のためにそこから抜け出すことはないことを再確認する〈かなしみ〉である。ジャックの死は〈私〉に〈みにくさ〉によって自分自身が苛められていることを再び知らしめたのである。

### おわりに

ジャックの死によって、ジャックが目指したような聖なる世界の可能性は有耶無耶のまま作品は閉じられる。その上、この手記内の現在である冒頭では、〈私〉はジャックの死を全く無効とする。代わりに提示されるのは、眼前に広がる次のような世界であった。

私は彼等の血ばしった眼や憤怒にゆがんだ頬を想像するだけで、うすい噛みが唇にうかぶのを禁じることができない。文化とか基督教とか、ヒューマニズムなどはなんの役にもたない今日なのだ。ナチに限ったことではあるまい。聯合軍であろうが、文明人であろうが、黄色人であろうが、人間はみな、そうなのだ。今日、虐殺される者は明日は虐殺者、拷問者になる。

ここで繰り広げられる世界は〈私〉の〈加虐〉の世界と共通している。

改めて本作品の舞台設定を振り返ると、それは暴力が正当化される戦争の世界であった。例えば、ナチは市民を「偶然が彼等に死をもたらす」という状況に追い込んだ。まさに「私」の言葉の通り「今日、虐殺される者は明日は虐殺者、拷問者になる」世界である。戦争によって全ての者が他者を苛める者にも苛められる者にもなりうるその世界では「私」の「加虐」の「慾望」も正当化される。「私」はII章で少年期を回想しながら、次のように述べている。

もし、すべてが、そのままだったなら、私は周囲の者たちが抱いている影像に応じながら生きていったかもしれない。

しかし、戦争が起った。その翌年、ヒットラーは麾下のナチ軍にポーランド進撃を命じたのである。

「私」は自身の行為を「戦争が起った」ためとする。「私」が「加虐」の「慾望」を持った起因が「自分が斜視の少年である」からであるならば、その「慾望」は人々が殺し殺されるのが前提となる戦争という場において表れてくるのではないだろうか。「加虐」の「慾望」が正当化されたその世界では、「私」は自らが苛められていることを繰り返しかるしかなく、ジャックが崇高な世界に辿り着くこともできない。それはすなわち「白い人」を書いた時点の遠藤には、その姿しか描けなかったということであろう。

註

- (1) 「近代文學」五月号、六月号（昭和三十・五、六、近代文學社）  
(2) 本作品の文壇での評価は様々であったことはすでに論じられてきた通りで

ある。その詳細は笠井秋生が「白い人」——人間を超えた存在と相剋の劇」(笠井秋生「遠藤周作論」、昭和六二・十一、双文社出版)の中で整理している。

- (3) 「白い人」研究の最近の傾向として「近代文學」五月号、六月号（昭和三十・五、六、近代文學社）に発表された初出に注目するものが見られる。勝呂奏「遠藤周作「白い人」論——初出稿から読む」(「桜美林論考」第四号、平成二五・三、桜美林大学)や小嶋洋輔「遠藤周作の留學——「白い人」に描かれたフランス」(「遠藤周作研究」第五号、平成二四・九、遠藤周作学会)などがそれに当たる。初出と「遠藤周作文学全集」第六卷(平成十一・十、新潮社)を比較すると異同箇所は多数あり、そこにスポットを当てる論は「白い人」研究に新たな知見を与えたと言える。しかし、本稿では加筆・修正を著者自身が承認していることから、定本とされている「遠藤周作文学全集」第六卷をテキストとし、本稿における本文引用も全て右に拠った。

- (4) 水谷昭夫「白い人・黄色い人」(「国文学」解釈と鑑賞」二月号(昭和四十八・二、學燈社))

- (5) 武田友寿「最初の小説」(武田友寿「遠藤周作の文学」、昭和五〇・九、聖文舎)

- (6) 笠井秋生「白い人」——人間を超えた存在と相剋の劇」(笠井秋生「遠藤周作論」、昭和六二・十一、双文社出版)